

北響堂山石窟北洞に表された弥勒三会の世界

清水真澄（同志社大学）

六世紀半ばに開かれたと考えられている響堂山石窟は、中国河北省邯鄲市の鼓山山麓に位置する。同石窟は南北に分かれ、中でも最大規模を誇る北響堂山石窟北洞は、北齊初代皇帝・文宣帝により造営され、またその父・高歡の墓洞という伝承を持つ、北齊王朝に関わりの深い重要な窟である。

北洞内は中心方柱形式になっており、方柱の正面・左右側面の三面に仏龕が造られている。鞏県石窟や天龍山石窟に見られるような四面四仏形式とは異なる点が注目できる。また方柱仏龕内部にはそれぞれ如来坐像・如来半跏像・如来倚坐像を中尊とする三尊像が表されているが、この尊像構成も他に例を見ない珍しいものである。さらに洞内をぐるりと取り囲むように周壁に穿たれた仏龕は宝塔を象っていることが特徴で、その上部に表された宝珠装飾は立派で美しく、洞内を極めて印象的に荘厳している。

このような北洞の尊像構成・洞内装飾及び造営背景については、諸先学により様々な論考が出されているが、未だ定説に至らず考察の余地はあると思われる。そこで本発表では、方柱仏龕の三軀の如来像の姿を改めて確認し、方柱基壇に表された神王像を手がかりとして、三軀全てが弥勒如来像であることを検討する。そしてこれらの弥勒如来像は『仏説弥勒大成仏経』を典拠とし、下生した弥勒の、成仏から弥勒三会の説法の場面を表したものである可能性を提示したい。

また、弥勒三会を表した同時代の作例として須弥山図浮彫裏面・弥勒浄土図（四川省博物館所蔵）を取り上げ、その図様の検討を踏まえて、北洞内荘厳の宝珠及び宝塔モチーフが、『大成仏経』の記述に一致することを確認する。以上の考察より、北洞は仏像・洞内荘厳を含め、全体として『大成仏経』を典拠とした弥勒下生信仰に基づき、「弥勒三会の世界」を表したものであると結論づけたい。

この北洞を北齊時代に具現化された弥勒三会の世界と捉えるならば、弥勒の下生は五十六億七千万年後という遠い未来ではなく今この現世であるという、現世利益的な弥勒信仰が浮かび上がる。そして弥勒の下生する世界を治めるのは転輪聖王であるということも考慮し、北洞の造営背景として、文宣帝の弥勒信仰と転輪聖王への意識を想定したい。文宣帝は、現世において転輪聖王として弥勒三会に参加して悟りを開くとともに、理想的な皇帝として国を治めることを願ったものと考えられる。